



ノーベル賞授賞の原動力となった

ヒバクシャの終わりになき戦い

田中 熙巳

日本被団協代表委員

たなか・てるみ
旧制県立長崎中学1年だった13歳の時、爆心地から3・2キロ離れた長崎市内の自宅で被爆。東京理科大学卒業後、東北大助手を経て十文字学園女子短期大学部教授を務める。日本被団協事務局長は85～87年、2000年～17年6月まで通算20年務める。現在は代表委員。



17年12月10日にノルウェーのオスロでノーベル平和賞の授賞式が行われた。式典には核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）と連携して活動してきた被爆者の代表も招かれた。カナダ在住のサーロー節子さん（85）とともに、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の代表委員・田中熙巳さん（85）と同事務局次長の藤森俊希さん（73）も出席。田中さんは長年にわたり被爆者運動をリードしてきたひとり。今あらためて田中さんの被爆体験、核廃絶への思いを聞いた。（聞き手 村田くみ）

村田 くみ

ジャーナリスト

戦場に駆り出された子どもたち

私は昭和7（1932）年満州（現在の中国東北部）で生まれました。親父は陸軍の軍人だったので、満州を転々としていた記憶があります。家にはメイドさんがいて、冬には親父がスケートに連れて行ってくれた。官舎で暮らしていたので食べ物もありましたし、不自由なことはなかったと思います。

生活が一変したのは下の妹が生まれた昭和13（1938）年。親父が脳出血で突然亡くなった。私とお風呂に入っていて「お前先にあがれ」と。上がってから間もなく、お風呂場から変な声が聞こえるので、何だろうと思ったら親父が倒れた。葬式が終わって、翌月ぐらいに、二人の伯母を頼って母と兄、二人の妹とともに長崎市の中川町に移り住んだのです。当時、収入は親父の恩給と、お袋が裁縫の内職をして生計を立てていました。お袋は1日中働き詰めだったので、ご飯を炊いたり、魚をさばいて焼いたり、家事は私の仕事。子どもの頃に学んだので今も包丁持ったらうまいですよ（笑）。

いたので8月9日に長崎にはいませんでした。中学1年生（旧制長崎県立長崎中1年）になってからは、週に3日「戦車壕」を掘る作業に駆り出されました。沖繩戦の後だったので、アメリカの戦車の上陸しても丘に上がって来られないように深い溝を海岸線沿いに掘るんです。穴を掘っている最中に戦闘機が来たら急いで物陰に隠れて。今の子どもたちの生活からは想像もつかないと思いますよ。

ほかにも飛行機を飛ばす燃料を集めるために、松の幹に傷をつけて樹液を集めたり、松根油をとったり。子どもたちは本気でアメリカ兵を殺すために竹やりをつくっていました。運動場を開墾して芋を植えるなど、勉強するどころではありませんでした。

7月下旬から8月にかけて長崎でも造船所を中心に本格的な爆撃がありました。そして、8月9日は午前8時に空襲警報が鳴って、1時間後に解除。今度は警戒警報が鳴って1時間半ぐらい経ったので「何もないからそろそろ解除かな」と思っていました。小学生以下は防空壕の中に避難しなければなりません。中学生以上は空襲警報が解除された時点

で作業に戻った。だから軍需工場で働いていた多くの生徒たちは被害に遭ったのです。

私は警戒警報が解除になってから、学校に行けばいいと、自宅の2階で本を読んでいました。そうしたら1機の飛行機の爆音が聞こえてきました。

「低空で飛んでいるな」

飛行機を見ようと窓から空を見上げてても厚い雲に覆われて見えなかった。部屋の中に戻ろうと振り返った瞬間、何も見えないくらい真っ白に光った。これは何だと驚いて、慌てて2階から1階に駆け下りて玄関の前で目と耳を塞ぎ、咄嗟に体を伏せました。

それからの記憶は今もありません。

爆風が飛んできて爆音も聞こえてくるんですが、全然記憶に残っていないんです。

焼け焦げた遺体、放置された重症者で街はあふれる

しばらくしてから母のつぶやきで目が覚めました。自宅の窓ガラスは1枚も割れないで、私の体の上のし

かかっていた。これが粉々になっていたら血だらけになっていたと思うのですが、それが割れなかったのは今でも謎です。隣の家は我が家と同じ構造でも、ガラス窓は割れて畳に突き刺さっていた。あのまま2階にいたら体ごと吹き飛ばされていたでしょう。母も二人の妹も奇跡的に無事でした。避難した防空壕には血だ

らけの住民が集まり、救護所になっていた学校の講堂は重症者の「水をください」「お母さん」という、うめき声であふれていました。そして、遺体を校庭で焼くにおいが漂っていました。

伯母さんたちの安否を案じていたところ、母のもとに「伯母さんが危ない」と伝えに来てくれた人がいました。伯母さんたちは元々、市の中心地に住んでいましたが、「ここには危ない」と、疎開した先が爆心地から500メートルと700メートル、浦上天主堂の近くだった。3日目の朝、お袋と一緒に伯母さんたち親戚を探しに行きました。市電が通る海沿いのルートではなく山の中を歩いて、ようやく市内を見渡せるところまでたどり着きました。

「なんだこれは――」

一面焼け野原で港まで一望できる。コンクリートで建てられた学校は中が空洞、家屋も鉄筋の工場もベツチャンコ。伯母さんの家に向かう途中、焼けた家、いたるところに黒焦げの遺体が散乱し、重症者が放置されていた。私たちが伯母さんの家に着くとすでに伯母さんは息途絶えて、焼くためのやぐらが組まれている。おじいさんは真っ黒な顔をして

大やけどを負い、地面にへたり込んで動かなかった。「おじいちゃん」と呼んでも返事がない。「水が欲しい」と口をモゴモゴさせて苦しんでいた。もう一人の伯母さんは大学生のいとこと炭のような焼死体で見つかった――。まさに地獄絵。

私にとっての被爆者は、本当にひどい被害を受けた人たち。体や家を焼かれて、健康を害し、急性症状が出た人。そういう人たちが街中で見えたので「私は被爆者です」などと、長い間とても言うことができなかったのです。

戦後から始まった本当の戦い

戦後が私たちの本当の戦いでした。連合国による日本の占領が終わるまで（1952年4月28日サンフランシスコ講和条約の発効）親父が残してくれた恩給の支払いがストップしたのです。収入が完全になくなってしまったのです。さらに急激なインフレで預金封鎖が起きて、家を買うために貯めておいたお金も引き出せなくなりました。お袋の着物や身の回りのものを売って、その日の食べる物を買う「タケノコ生活」を余儀なくされました。幸い長崎には港があったので、私は学校に行きながら、